

『論考』における「私の言語」と「私の世界」

吉 田 寛

はじめに

ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』¹のT5.6「私の言語の限界は私の世界の限界を意味する」と、それにつづく「私」と「世界」にかかわる諸テーゼは、「像の理論」といわれる『論考』の意味論とウィトゲンシュタインの倫理観・人生観とを結びつける、『論考』解釈上の最も重要な箇所のひとつである²。しかし、このT5.6のテーゼは難解とされ、従来さまざまな解釈が提出されてきた。本論文では、まずこのテーゼにおける「言語」・「世界」や「限界」という語の内実を、「像の理論」の意味論的枠組み(I)や言語理解の観点(II)から明らかにする。ついでウィトゲンシュタインの人生観(III)という文脈において、T5.6のテーゼの「私の」そしてまた「限界」という語の内実を検討し、このテーゼ全体の解釈の問題に一定の見通しを与えたい。

I 『論考』の意味論的枠組み

まず、「像の理論」の意味論的な枠組みを『論考』T1～T5の諸テーゼに従って簡単に整理し、これを満たす人工言語Sとその意味論を構成して示す。そしてSにおいて「言語」と「世界」がそれぞれどう位置づけられるかを明確にして、T5.6のテーゼから「私の」を除外した「言語の限界が世界の限界を意味する」というテーゼがどのように理解されるべきかを確認する。

意味論的枠組みは、あらゆる言語表現それぞれに対して特定の意味をあてがうようなものでなければならない。ウィトゲンシュタインは『論考』執筆以前から、命題は真であるかあるいは偽であるかのどちらかであるという二値原理の要請のもとで、否定命題・偽の命題をふくむ命題の意味論の構成に苦心していた。そこで『論考』の「像の理論」は、まずこのような意味論的課題に答える理論として大枠が把握されるべきである。

『論考』の意味論的枠組みは次のように整理される。まず言語における基本的な要素である名が、対象Gegenstandを意味Bedeutungとして表す(T3.203)。そして名どうしの結合である要素命題は、その名の表す対象どうしの結合である事態Sachverhaltを表す

(T4.21)。要素命題が真か偽かであるのに応じて、その表現している事態は存立Bestehenしているかしていないかである(T4.25)。事態の存立非存立の組み合わせが可能な状態 Sachlageであり(T2.11)、命題は要素命題の真偽の組み合わせをいくつか特定することで、対応するいくつかの可能な状態(＝可能性)をその命題の意味Sinn³として特定し、表すことができる(T4.2)。その特定する状態が現実の世界と一致するか否かによって、命題は真か偽かのどちらかになる(T2.21)。命題の総体が言語であり(T4.001)、真である要素命題の総体の表現している状態、すなわち現実存立している事態の総体が、現実世界である(T1.1. T2)。

これを満たす人工言語Sとその意味論を簡単に構成し、以後の議論で用いる。

- S1 Sに対する対象を f , a , b とする。
 S2 Sにおける名“ f ” “ a ” “ b ” は、それぞれ対象 f , a , b を表す⁴。
 S3 Sにおける 有意味な要素命題は“ $f a$ ”と“ $f b$ ”だけである。
 S4 要素命題“ $f a$ ”, “ $f b$ ”は、事態 $f a$, $f b$ を表す。
 S5 要素命題は真か偽かであり、それに応じて事態は存立か非存立かである。
 S6 現実存立している事態の総体が現実の世界である。
 S7 S1～S6に従って、Sの要素命題の真偽の可能な組み合わせとこれに対応する事態の存立非存立の可能な組み合わせ(＝可能な状態)を、図1(＝真理表)と図2(＝論理空間)で示す。すると真理表の①②③④のうちのいくつかの特定が、論理空間の①②③④のうちのいくつか(＝可能性)の特定に対応する。

図1 (真理表)			図2 (論理空間)		図3 (現実世界)
“ f a ” “ f b ”			f a f b		
真	真	①	f a f b	❶	{ f a , f b }
真	偽	②	f a	❷	
偽	真	③	f b	❸	
偽	偽	④		❹	

- S8 “ $f a, f b$ ①②③④”の①②③④のいくつかに“真”を割り振って特定し、それに対応する①②③④のいくつか(＝可能性)を意味として特定する命題を表す。

S8-1 例えば状態①を特定する命題“ $f a \wedge f b$ ”は

“ $f a, f b$ (真***)”と表記され、可能な状態①がその意味である。

S8-2 また例えば状態②④を特定する命題“ $\sim f b$ ”は

“ $f a, f b$ (*真*真)”と表記され、可能な状態②④がその意味である。

S9 現実世界と一致する状態を、意味として特定している命題は真であり、特定していない命題は偽である。

S10 言語Sは、S1～S9の手続きで得られた命題の総体に尽きる。

S11 仮に要素命題“ $f a$ ”, “ $f b$ ”が共に真であるとする。このとき現実の状態は、事態 $f a$ と $f b$ が存立している状態であり、現実の世界は $\{f a, f b\}$ で与えられる (図3)。これは可能な状態①に一致する。

S11-1 このとき例えば①を意味として特定している“ $f a \wedge f b$ ”は真である。

S11-2 またこのとき例えば①を意味として特定していない“ $\sim f b$ ”は偽である。

S1～S11 はSのすべての命題に対して、否定命題や偽の命題に対してもそれぞれ例えば S8-2, S11-2 のように、対応するべき意味を保証し、明快な意味論をあたえている。つまり最初に掲げた意味論的課題を、S5で示された二値原理のもとで満たしている。また「言語」と「世界」は、S10とS6によってSとその意味論において明確な位置をあたえられている。

ではここで「言語の限界は世界の限界を意味する」は、どのように理解されるだろうか。言語Sの限界は、S10によりS1～S9の手続きで得られる可能な命題の限界である。さてSのどのような命題も、図1の真理表の中の①②③④のうち任意のものに真を割り振って特定することができる。つまり、論理空間の中の①②③④のうちどのような組み合わせでも特定することができる。すなわちSに対する世界のどのような可能性でも表現できるのである。しかし命題は、真理表の外を特定することはできない。つまり世界の可能性の外は表現できない。こうしてSの命題で表現できる限界は、Sに対する世界の可能性の限界に対応することになる。Sがそれに従って構成された『論考』の意味論的枠組みにおいても、言語と世界のこのような関係は一般的に成り立つ。そこで『論考』の意味論的枠組みにおいて、「言語の限界は世界の限界を意味する」は、「有意義な言語の限界は世界の可能性の限界に対応する」と理解される。

II 言語理解の理論

言語は、使用されうるような、すなわちその現実の使用者である我々に理解され、構

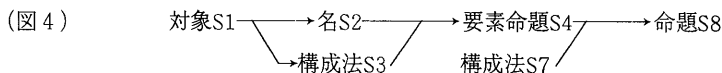
成されうるようなものでなければならない。『論考』の言語理論も当然、このような言語に対する理論でなければならない。II節ではこの要請を満たすよう、I節で得られた意味論的枠組みと人工言語Sを、言語理解の観点を考慮しつつ再構成する。そして再構成されたSを利用して、『論考』における「言語の限界」と「世界の限界」の対応関係をより明晰にする。そして「言語の限界が・・・」のテーゼを、「我々の理解しうる言語の限界が・・・」として捉えなおす。

II-1 言語理解と意味創造の方向性

さて、ある言語表現を理解するとはその意味を知ることであり、すなわち「像の理論」に従えばその言語表現に対応するものが何であるかを知ることである。命題であれば、それによって特定されている可能性が何であるかを知ることである(S8)。

ここで注目すべき事情がある。それは言語の創造性といわれる事情である。我々は命題によって特定の可能な状態を表現したり理解したりしている。このとき我々は、その状態をかつて経験したことがなくても、それどころかその状態が現実ではなくそもそも経験できないものであっても、その命題を構成・理解できなければならない。というのはもしそうでなければ、ある命題を理解するためにはその命題の表現する状態を我々が実際に経験していることが必要になる、つまりその状態が必ず現実の状態であり、すなわちそれを表現する命題は必ず真でなければならないになってしまうだろうから。そこで我々は命題をその真偽に先立って構成する、つまり経験に先立ってその命題に対応する意味として可能性をいわば創造するのでなければならない(T4.027)。言語理解の理論は、少なくともこの言語の創造性という事情に合致するようなものでなければならない。

『論考』はこの問題に対して、すべての命題はその構成要素(e.g. 名詞・動詞)の理解とそこからの構成法の知識(e.g. 接続詞)によって構成され理解される、すなわち創造される、と答える(T4.024,4.025)。例えばSのすべての命題は、その構成要素である名“f” “a” “b”の意味の知識とそこからの要素命題の構成法、そしてそこからの命題の構成法の知識によって得られる。加えて、表現された記号を命題として理解するためには、その表記法の知識も必要であろう。この事情は言語理解の方向性として理解され、この方向性に従ってI節の言語SのS1～S8は整理され、以下のように示される。



S1～S8の知識によって、命題の理解すなわち特定される可能性が何であるかの知識が得られるのである。S2, S4, S8には、規約によって我々の側から言語に対して任意に与えられる表記法の知識が含まれる(T3.34)。そしてまた、S7で示された要素命題からの命題の構成法⁵については、S5で示された二値原理により、機械的な手続きとしてはじめから決定されている。つまり十分に理性的な言語使用者には、とくに知識として与えられる必要のないものである。そこで命題理解に特に必要な知識は、任意の取り決めにすぎない規約的な知識を除くと、名とそこからの要素命題の構成法⁶の知識(S2とS3)に還元される。

S2によって“f”はfに、“a”はaにそれぞれ対応する。そこからS3によって、例えば“a f”などの無意味な結合が排除され、事態f aに対して一対一対応するよう要素命題“f a”が得られる。ところで『論考』は、I節では別個にあたえられていたS2, S3の知識を、対象の内容と形式の知識（当の対象がどれであり、どのようなものかという知識）として、ともに対象の知識(S1)に還元する。S3の知識が対象の形式の知識として対象に帰されることによって、例えば対象fについてはf()と理解され、これによって“a f”や“f f”のような無意味な命題の構成が排除されるのである。

こうして我々の言語理解は、『論考』では、対象→命題という言語の意味創造の方向性において説明されるのである(T4.51)。

II-2 『論考』の現実定位主義

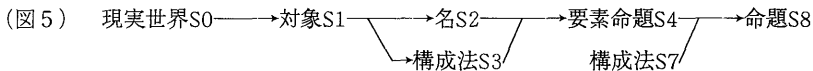
さて我々は表記法については任意に工夫しうるが、しかしそれ以外のことについては、規約として我々の側からあてがうのではない以上、現実世界の側から経験を通して⁷我々に与えられるのでなければならない(T3.342)。そこで名の表す対象は非現実の虚構の対象ではありえない。というのはもし名が非現実の対象を表すとしたら、我々はその対象を現実の世界で同定することも、その形式を経験を通して知ることも、原理的にできないであろうから。このとき我々は、この対象から明確な規準をもって有意義な命題を構成しえないであろう。従って、我々が無意味な命題（e.g. “a f”）を避けつつ有意義な命題を構成しうる以上、対象は現実の対象でなければならない。

対象が現実の対象であるなら、対象は現実に存立している諸事態に現れている対象である。つまり対象は現実世界の対象である。我々は原理的に経験しうる現実世界に現れている対象から、言語を通して、現実世界を越えて可能な世界までも創造・理解できる

のである⁸(T2.022)。例えば、SにおいてS11で想定されたように現実世界が $\{f a, f b\}$ であれば、Sにおける対象は f, a, b であり、Sの命題は、名“f” “a” “b” から構成される。しかし、もし仮に現実世界が $\{f a\}$ であったならば、bという対象は現実世界には現れておらず、したがって我々はそれに対応する名“b”をSにおいて認めることはできなかったであろう。

そこで図4の図式はさらに、言語理解の現実定位主義的な図式として再構成されなければならない。すなわちある言語がその現実の使用者である我々に理解されうものであるなら、その言語の意味の理論は、現実世界→対象→命題という意味創造の方向性に合致するものでなければならない。そこでSにも、新たにS0が加えられ、Sの意味論はS0→S10という方向性において把握されるべきである(図5)。

S0 Sに対する現実の世界は $\{f a, f b\}$ である。



こうしてI節で「有意味な言語の限界は世界の可能性の限界に対応する」と解されたテーゼは、言語理解の観点から現実世界→言語(命題)という方向性のもとで、「我々の理解し創造しうる有意味な言語の限界は、現実世界の対象の総体(から構成される可能性)の限界に、対応する」と捉えなおされる。

III 「私の言語」と「私の世界」

検討してきたテーゼ「言語の限界が世界の限界を意味する」の「言語」と「世界」に対して「私の」が付加され、T5.6「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」のテーゼが得られる。III節では、ここで「私の」や「限界」が何をいみしており、「私の言語の限界」・「私の世界の限界」がどのような内実をもっているか検討する。そしてT5.6のテーゼを捉えなおし、このテーゼが『論考』の言語観・世界観をウイトゲンシュタインの倫理観・人生観にどのように結びつけるものであるのかを明らかにする。

III-1 「私の」に関する諸解釈

さてT5.6における「私の」を「唯一の普遍的な主体の」と解するか、「ある個別的な主体の」ととるか⁹に応じて、「私の言語」・「私の世界」に対してそれぞれ次のような解釈 i、ii が考えられる。

- i ある個人に相対的でない普遍的な言語・ある個人に相対的でない普遍的な世界
- ii ある個人に相対的な言語・その個人に相対的な世界

i の解釈は、独我論が貫徹されると実在論に一致するというT5.64のテーゼに関して、『論考』の「世界」をどちらかといえば実在論的に捉える。そこで実在としての唯一の世界に対して唯一の言語そして唯一の主体を対応させる。そして主体の個別性ととともに、この主体に相対的な「私の言語」の個別性も否定するのである。そこで「私」とは普遍的言語と普遍的世界に対する、普遍的な唯一の主体ということになろう。これは、T5.6につづく諸テーゼを独我論批判の方向で解す傾向をもつ、有力な解釈である¹⁰。

このiの解釈はしかし、言語理解の観点から見て不自然なものである。というのは我々の経験には個人差があり、したがって使用できる名（そしてそこから構成される命題・言語）にも差があるはずであるが、このような個別性はまったく説明がつかなくなるであろうから。それにまた『論考』では「世界」＝「生」とされている(T5.621)が、iの解釈では我々ひとりひとは固有の生を生きているのではなく、実は同じ生、何か普遍的で唯一の生を生きていることになってしまう。

一方iiの方向の（下で説明されるii'も含む）解釈は、T5.6の「私」を「他の人に対する私という個別的で現実的な一人の人間」といういみで解し、「私の言語」を「個別的なこの現実の私の理解する、一定の個別性をもった言語」と捉えるものである¹¹。

ここで「私の言語」を、例えば「日本語」か「英語」かという表記法のレベルで考えるのは適当でない。というのは表記法の選択は我々に任意であり、それは表記される世界の側に何ら影響しない。従って私がある表記法を採用したからといって、それによって「私の世界」が何らかのいみで限界づけられることはないからである(T3.34)。

また「私の言語」を、「名の私に固有な結合可能性」か「名の私に固有の内容」かの、どちらか一方でのみ解することもできない。というのは名の結合可能性と名の内容のどちらも、その名に対応する対象からその形式と内容としてS1のレベルで同時に得られるのである以上、どちらか一方のみが私に相対的であることは不可能であろうから。

そこで「私の」という限定は、世界の内容と形式を決定する対象そのものに、そしてそれに対応する名にかかるのである、というii'の解釈¹²が出されるであろう。この解釈によればたしかに、「私の世界の限界」は、私の知る現実の対象の総体の限界と解され、これはその対象に対応した名から構成される私の理解し創造しうる命題の総体、すなわち「私の言語」を限界づける。この解釈は、II節で提示された「我々の理解し創造

しうる言語」という言語理解の議論を、そのまま「個別的な私の理解し創造しうる言語」にまで押し進めたものである。このii'の解釈によって、「像の理論」の提示した言語は誰のものでもないような客観的な世界に関わるのではなく、個人的な世界すなわち個別的な主体の個々の生にかかわるものとなる。

このii'の解釈はiの解釈よりも、「私の」という表現をある個人を指す語として自然にとらえているし、また言語理解の理論ともよく合致する。私の使用する言語は確かに私が理解できる言語に限られるであろう。しかし私はなお、この解釈ではT5.6のテーゼの趣旨を汲みつくしてはいないと思う。というのは、なぜT5.6では「私の対象の総体」ではなく「私の世界」の限界なのかということが、この解釈では十分にはすくいとられていないからである。たしかに、「私の対象の総体の限界」と書いても「私の世界の限界」と書いても、それに対する「言語の限界」に関してはなにも変わるところがない。しかしあえて「私の世界」と書くことで込められている内実を無視することはできない。それは『論考』に込められた人生観・倫理観を無視することになろうから。以下でこの論点を考慮した解釈iiを提示し、解釈iiが解釈ii'に対して、そしてもちろんiに対しても決定的に有力であることを示す。

III-2 「私の世界」の二重の限界性

「私の世界」と「私の知る対象の総体」のちがいは、「世界」は単なる現実の対象のクラスではなく、その対象どうしの現実の結びつき方、すなわち事態としての現れ方を含んでいるということである。この私の対象の現れ方（＝私の世界）こそが、私の生の問題にかかわるのである。では、iiの解釈では「私の世界」は、いかにしてii'の「私の対象の総体」以上の倫理的な意味を持つのか。

ところで、「世界」はその構成要素たる対象についてはある個人の経験に相対的だとしても、その世界の事態の存立非存立の状態についてはその個人に相対的ではない。というのは、どの事態が存立しどの事態が存立していないかは、私の意志には依存せず偶然である(T6.373)のだから。そこで、私が私の意志に従ってどの事態を引き起こすか、すなわちどの行為をなすかという通常の倫理で問題にされることは、ここでは問題にはなりえない。

しかしやはり、なぜ現実の世界の状態がこのようであり別の可能な状態ではなかったのか、ということは私の生に大きく関わる問題なのである。例えば、もし現実がこうで

なければ私はもっと幸福だったのではないか、あるいは、もしかかくの状態が現実であれば私は幸福であっただろう、などとひとは感じるであろう。これがウィトゲンシュタインにとって、まさに生の問題であった(Cf. NB1916,6,11 - 8,2) ¹³。

このいみで「私の世界の限界」は、単に「他人に対する私の生の経験的な限界」だけではなく、「別でもありえたかもしれない私の生に対する、この私のこの現実の生という限界」や「ほかのおおくの可能な世界に対して、なぜ私はこの現実世界に生まれて、この現実限定されてしまったのかという限界」という内実が込められているのである。

この事情を明晰にするため、さきの人工言語 S とその意味論に適当な変更を加えて S' とし、その意味論を利用する。

S0' S' における現実世界を $\{f a, f b, g b\}$ とする。

すると S' における対象は f, g, a, b となり(S1'), これらの対象の形式に ¹⁴ 従って、あり得る事態は $f a, f b, g a, g b$ となる(S3')。この 4 つの事態に対して 16 段の論理空間が構成される(S7')。このうち適当に選んだ 5 つの状態を以下にリストアップする(図 6)。これは 16 段の論理空間の一部である。各状態は、現実世界に対してそうであったかもしれない世界として、我々の想像しうる可能世界である。ただし現実
は、可能な状態③と一致する状態であるとする (S11')。

主体 A

(図 6)

一 二 三 四			
f a f b g a g b	①		
f a f b g a	②		
f a f b g b	③		
f a g b	④		
f b g a g b	⑤		

主体 B

ここで、ある主体 A の経験が {一, 二, 三, 四} に、また別の主体 B の経験は {二, 三, 四} に限られているとする。すると A の世界は $\{f a, f b, g b\}$ であるが、B の世界は $\{f b, g b\}$ である。このとき、A の言語の限界は 16 段の真理表に示されるが、B の言語の限界は可能な事態 $\{f b, g b\}$ から構成される 4 段の真理表に尽き

る。このいみで、Bの言語はAの言語に対してよりせまく限定されている。この限定は、Bの知る対象の総体が、Aの知る対象の総体に対して限定されていることに対応している。この事情は先に解釈ii' で見たものである。

さて、ここでBの言語は、実は別のいみでも限界づけられているのである。現実がもし可能な状態⑤と一致するような世界であったとしたら、Bも $\{f b, g a, g b\}$ という自らの現実世界から対象 f, g, a, b を得て、事態 $f a, f b, g a, g b$ を理解し、これに応じて16段の真理表に対応する言語を得ていたことだろう。このいみで、Bの理解・創造可能な言語の限界は、Bの現実が他の可能性⑤に対して③に限られているという限界にも対応している。Bの言語の限界は、Bの現実世界の「他の人Aに対する限界」としてだけでなく、「他の可能性⑤に対する限界」としても与えられている。

そこで、「私の言語の限界」に対応する「私の世界の限界」は、私の経験世界の二重のいみでの限界、と解釈できる(ii)。この二重性は図6の表では、Bの経験世界が、水平方向「二、三、四」にだけでなく、垂直方向にも可能な状態③として、限定されていることに示されている。そして、解釈ii' では考慮されなかったこの垂直方向の限界性こそが、ウィトゲンシュタインにとって、生の問題すなわち幸福・不幸の問題にかかわるのである¹⁵。

たとえば図6において、仮にAが事態 $g a$ を意志しているとする。『草稿』では、主体の意志と世界すなわち現実の状態が一致していることが、幸福であると考えられている(NB1916,7,8)。そこで $g a$ の存立していないこのとき、Aはこれについて現実には満たされておらず、すなわちこれについては不幸である。そして、現実世界がたまたま可能な状態⑤であれば自分はずっと幸福であっただろうに、などとAは思うであろう。そしてAは、自分がなぜ別の可能な生を生きられなかったのか、なぜ自分は現実④のこの世界のこのAであって、例えば可能な世界⑤の別のAではなかったのか、などと思ひ悩むことであろう¹⁶。

『草稿』には、幸福な生が善き生であるとして、世界に一致して幸福に生きよ! とある(NB1916,7,30)。この倫理観がどれだけ『論考』に込められたかは判定の難しい問題である。しかしともかく、このような幸・不幸にかかわる倫理的ないみは、上で見たように「個別的な私の経験的現実世界」の、他人に対しての限界性(ii') からよりも、むしろ可能性に対しての限界性(ii) から生じていた。そこで『論考』の「私の言語の限界」に対応するものは、T5.6を私の「生」(T5.621)の問題に関連するテーゼと捉える

以上、解釈 i の「普遍的な世界の限界」でもなければ、解釈 ii' の「私の対象の総体の限界」でもなくて、まさに解釈 ii の「私の世界の二重の意味での限界」でなければならぬことが帰結する。

この ii の解釈においては、「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」という T5.6 のテーゼは、「私の有意味な言語すなわち私の理解し創造しうる命題の総体の限界は、この私の経験的現実世界の他人に対する限界と、そして別でもありえたかもしれないという可能性に対する限界との両方の限界に、対応している」と解釈される。そしてこう解釈してこそ、T5.6 のテーゼにおいて「像の理論」と生の問題に関する諸議論との結びつきが、見出されるのである。

おわりに

『論考』の「像の理論」は、I 節で提示されたような意味論的枠組みとしても、II 節で提示された言語理解の理論としても扱うことはできる。たとえば命題論理学の意味論においては、まずは I 節の意味論で十分であろう。しかしやはり、ウィトゲンシュタインの人生観も考慮して III 節で構成された言語観こそが『論考』の本来の言語観であり、特に ii の解釈に関連づけられたその世界観・人生観とあわせて、前期ウィトゲンシュタインの思想であると言うべきであろう。

『論考』の議論は抽象的ではあるが、我々の生とかけ離れた人工言語・理想言語にかかわる議論なのではなく、幸福だったり不幸だったりするような我々の現実の生において用いられている、実際の言語にかかわる議論なのである。

註

(1) 以下『論考』と記す。

Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-philosophicus*, Routledge and Kegan Paul, 1922.1961.

以下での引用は、断章番号を(T5.6)のように示す。

(2) Cf. 飯田隆『ウィトゲンシュタイン』講談社, 1997, pp.102 - 103.

(3) 本稿では区別せずに訳したが、『論考』において命題の意味は Sinn、名の意味は Bedeutung と区別されて用いられている。Bedeutung は現実世界の存在者、Sinn は可能世界の構成物に相当するであろう。(II-2を参照)

(4) S における言語表現を “ ” を付して示し、その表現に対応するものを “ ” を付さずに示す。

(5) 例えば “ $\wedge$ ” や “ $\sim$ ” などのいわゆる「論理定項」の知識。

(6) 変項だけを用いて、例えば “ $x R y$ ” と示されるようないわゆる「命題形式」の知識。1913

『論考』における「私の言語」と「私の世界」

年頃のRussellは、この知識と「論理定項」の知識をそれぞれ、対応するある抽象物の見知り Acquaintance に求めている。Russell, *Theory of Knowledge*, Routledge, 1992, pp.98 - 99.

- (7) 経験といっても、対象の経験は通常の経験とは区別された、通常の体験に先立つ特殊な経験である(cf. T5.552)。
- (8) この見解は、現代の可能世界意味論における現実定位主義actualism (See. Kripke.S. *Naming and Necessity*, Harvard U.P., 1972, pp. 15 - 20)に相当する。
- (9) 最も通常の読みは、『論考』の「私」は『論考』の著者ウィトゲンシュタイン自身を指すと考えるものであろう。しかしこの読みでは、このT5.6のテーゼの一般的・哲学的価値が失われてしまう。ゆえに『論考』の「私」は、その著者から見た「私」ではなく、その読者から見た「私」、あるいはもっと一般的に（「私」という語を含む）言語を使用しているその本人を指す、と解するべきであろう。また「ある個別的な主体」とか「唯一の普遍的な主体」という表現が避けられて「私」という表現が用いられることで、『論考』の議論が抽象的な言語や主体そして世界のモデルのようなものに関わるのではなく、実際の言語と世界とそれを生きる具体的な主体に関わるのだという読みが、示唆されていると思われる。

(10)e.g. Pears, *False Prison*, Oxford, 1987, pp.188 - 189.

(11)e.g.. M.Hintikka and J.Hintikka, *Investigating Wittgenstein*, Blackwell, 1986, p.65.

(12)e.g. M.Hintikka and J.Hintikka, *ibid*, p.57.

(13)Wittgenstein,L, *Notebooks*, Blackwell,1961.1979.

以下での引用は、年、月、日を(NB1916.11.27)のように示す。

(14)例えば f, g を性質的なもの、a, b を個体的なものと考えよ。

(15)ウィトゲンシュタインは、主体の他人に対する態度でなく、むしろ主体の自らの生に対する態度こそ倫理・人生の問題であると考えたのである。

(16)一方、Bは g a という事態を想像することもできないのであるから、g a が存立していないことを不幸に思うことはない。

〔哲学博士課程〕

“My language” and “my world” in Wittgenstein’s *Tractatus*

Hiroshi YOSHIDA

Thesis 5.6 of Wittgenstein's *Tractatus*, “The limits of my language mean the limits of my world”, is known as one of the most difficult thesis to interpret. It is said that the thesis connects two discussions, namely the discussion of semantics and that of ethics. In this paper, I try to explain how these two discussions are connected by the thesis 5.6.

My discussion consists roughly of two parts. The first part is about the relationship between the thesis 5.6 and *Tractatus*'s language theory, which is called “picture theory”. According to the picture theory, we construct “pictures” as propositions from the actual empirical world, and the pictures represent possible states of the world. So my language, i.e. the language I understand, is limited to my empirical world.

The second part is an attempt to show that the thesis that my world is limited, in *Tractatus*'s context, means that my life is limited in an ethical sense. “My world” is limited not only in respect to other people's world, but also in respect to the other possible worlds of mine. And because my actual world is my life, my life is in one sense limited to this actual life in respect to my other possible lives, which could be better or worse than the actual one. This limitation is to be thought as ethical.

From these discussions, we can conclude that thesis 5.6 connects Wittgenstein's language theory with his ethical view in the sense we saw above.